

海外事務所
だより

ニューヨーク州における
移民児童教育政策

ニューヨーク事務所所長補佐 大東 たかし (浜松市派遣)

ニューヨーク
事務所

近年、地域における「多文化共生」の推進の必要性が日本国内で叫ばれはじめて久しくなりますが、外国人の市民を多く抱える地域の中で、大きな関心の一つとなっているのが、外国人児童に対する教育と云えるのではないのでしょうか。

例えば、外国人住民を多数抱える自治体で構成される外国人集住都市会議は、外国人児童への教育について、重ねて提言を行ってきました。また、文部科学省でも二〇〇七年度から検討会を設け、外国人児童に対してどのような教育を提供していくのか、具体策の模索が始まっているところです。

外国人児童の教育に関して近年議論が高まってきている日本に対して、アメリカは建国時からの移民国家です。アメリカでも移民児童に対する教育については、政治的潮流の影響を受けつつ、絶えず揺れ動いているところではありますが、本稿では、当事務所が立地するニューヨーク州における、英

語能力に限りがある移民児童に対する教育施策を簡単に紹介したいと思います。

州レベルの取組み
アメリカにおける英語能力に
限りがある移民児童の数

アメリカでは、本人が外国生まれであるなどの理由により、英語能力が一定の基準を下回る生徒を「英語能力が限られた生徒」(Limited English proficiency=LEP) または「英語学習者」(English Language Learner=ELL)と呼んでいます。少し乱暴な推計かもしれませんが、このLEP/ELLの数が、英語を話せない移民児童の数がある程度反映しているとも言ってもよいでしょう。

ニューヨーク州教育部の資料(注1)によりますと、二〇〇三年度にはアメリカ全体の公立学校には、約五〇一万人のLEP/ELLがいます。州別に見ると、やはり多

いのはカリフォルニア州の約一六〇万人ですが、ニューヨーク州も全米四位の約一九万人となっており、たった一つの州で、日本における日本語指導が必要な外国人児童生徒数(約二万二〇〇〇人(注2)の約九倍のLEP/ELL生徒数を抱えていることとなります。

(注1) <http://www.emsc.nysed.gov/biling/PPMeetings-15-06ppt>
(注2)二〇〇六年 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」より

1. ニューヨーク州の義務教育

アメリカにおいて、義務教育の提供は州政府の責務とされています。

ニューヨーク州では、州憲法において無料の教育機会の提供が州政府の責務であるとされています。また、州教育法においては「ニューヨーク州においては、いかなる者も人種、信条、肌の色、国籍を理由として学校から排除されることは無い」とあり、外国人児童に対しても、アメリカ市民と同様

の教育機会が保障されています(注3)。

(注3) ただし、日本のような保護者に対する「(子)女子」教育を受けさせる義務」は規定されていない。

2. LEP/ELLへのサービス

ニューヨーク州教育部では、一九六九年にバイリンガル教育課が設置され、以降、州内の学校区に対して、LEP/ELLを対象としたプログラムの開発・実施に関するサポートを行ってきました。

(1) LEP/ELLの判定

ニューヨーク州では、予備審査から再評価まで、LEP/ELLの認定についてのシステマティックな判定プロセス(図1)があり、各学校はこの手順に従って生徒の語学能力を判定しています。

(2) LEP/ELL教育に関する規則

州政府では規則(注4)を定め、これらLEP/ELLに対するサービスに関して、州内の学校区に対して数々の義務を課しています。ここではいくつか代表的なものを紹介したいと思います。

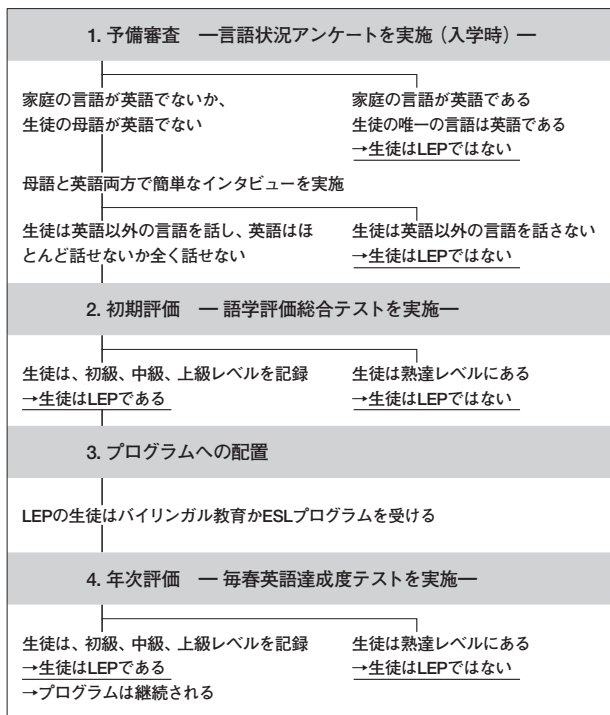
○計画の作成や書類の整備

・学校区は、LEP/ELLが必要とする教育を行うための包括的計画やプログラムの内容・テストの結果などを記した書類を作成しなければならない。

○プログラム実施について

・同一の母語を持つLEP/ELLが、ある学校の同学年に二〇人以上在籍して

図1：ニューヨーク州におけるLEP判定プロセス



いる場合、学校区はその生徒たちに対してバイリンガル教育(注5)プログラムを提供しなければならない。

・同一の母語を持つLEP/ELLが、ある学校の同学年に二〇人未満在籍している場合、学校区はその生徒たちに対してESL(注6)プログラムかバイリンガル教育プログラムのいずれかを提供しなければならない。

○情報提供について

・学校にかかわる情報は、LEP/ELLの保護者に対して英語または保護者の母語で提供されなければならない。

・LEP/ELLの保護者は、生徒がバイリンガル教育またはESLプログラムを

(注5) 二言語併用教育(その国で主流である言語が不自由な児童生徒にその母語で教育を行う制度)
(注6) (英語を母語としない人に対する) 第三言語としての英語教育

学校レベルでの取組み

1. ニューロッシェル市とワード小学校

次に、実際の小学校における取組みの例を紹介したいと思います。今回訪問したWilliam B. Ward 小学校のあるニューロッシェル市は、ニューヨーク市の郊外に位置し、白人系三八%、黒人系二五%、ヒスパニック/ラティーノの比率は三六%と多様な人口構成となっています。同校の生徒数は約二二〇人。うちLEP/ELL数は約四〇〇人

受けることを、英語または保護者の母語で通知される。その際には、ほかのプログラムを選択できる可能性もあるということも通知しなければならない。

(参考) 州ではこのほかにも、新規入国者などを対象とした革新的なプログラムに対して補助金を支出したり、ドミニカ共和国と教員交換プログラムを実施したりするなど、多様な取り組みを行っています。また、達成度の評価方法や、既存の教育プログラムの内容に関しても、その有効性を検証し、常に改善を目指しています。

(注4) Commissioner's Regulation Part 154 http://www.emsc.nysegov/biling/NEWCRPT_154.html

と、実に約三分の一を占めています。

2. ESLクラス

見学することができたESLクラスは、二年生の子が四〜五人と小規模で、教師は一人。日本のいわゆる「取り出し授業」（一般の授業とは異なる教室で集中的に日本語指導を行う形式）に似た光景です。子どもたちの出身国はベトナム、ロシア、ペルーなどさまざまで、子どもたちはイラストを活用したアルファベットの書き取り教材に取り組んでいました。担当教師によれば「映像と言葉を結び付けることが重要である」とのことです。また、パソコンを使って、インターネット上にある教材も活用していた点が印象的でした。

3. デュアルランゲージプログラム

同校の教育の最大の特徴となっているのが「デュアルランゲージプログラム」です。同プログラムは、英語話者とスペイン語話者が混在するクラスで、英語とスペイン語の双方を学んでいくことで、二言語の能力を育成することを目標としています。

このプログラムでは、英語話者の児童とスペイン語話者の児童がそれぞれ半数を占めるという形で学級（同一構成で各学年二クラス）が編成され、またこの二クラスのために、英語のみを話す教諭がいる教室と、スペイン語のみを話す教諭がいる教室がそれぞれ用意されます。

例えば一年一組に所属するスペイン語話者の児童の場合は、語学については一年二組に

所属するスペイン語が母語の児童と一緒になり、スペイン語環境の教室でスペイン語の授業を、英語環境の教室で第二言語としての英語の授業を受けます。一方数学や理科、社会などそのほかの科目については、同じ一組に所属する英語話者の児童と一緒にになり、ある日は英語にて授業を受け、その翌日はスペイン語にて授業を受けることとなります。（図2）

図2：デュアルランゲージプログラムのカリキュラム例

	月曜日	月曜日	火曜日	火曜日
1 時間目	スペイン語 (S) 1S+2S	英語 (E) 1E+2E	スペイン語 (S) 1S+2S	英語 (E) 1E+2E
2 時間目	SSL (S) 1E+2E	ESL (E) 1S+2S	SSL (S) 1E+2E	ESL (E) 1S+2S
3 時間目	算数 (S) 1S+1E	算数 (E) 2S+2E	算数 (S) 2S+2E	算数 (E) 1S+1E
4 時間目	理科/社会 (S) 1S+1E	理科/社会 (E) 2S+2E	理科/社会 (S) 2S+2E	理科/社会 (E) 1S+1E

(S) スペイン語での授業
1S=1組のスペイン語話者
2S=2組のスペイン語話者
SSL=第二言語としてのスペイン語

(E) 英語での授業
1E=1組の英語話者
2E=1組の英語話者
ESL=第二言語としての英語

わたしがこのプログラムを受けてきた五年生の教室を訪れた際には、児童たちは自分の母語と異なる言語で行われる授業においても積極的に発言していました。同校の教諭によれば、このデュアルランゲージプログラムが、数あるバイリンガル教育のモデルの中でも最も効果的であるとの話でしたが、英語を母語とする家庭の間でも第二言語習得熱が高いことが、このプログラムを可能にしているのかもしれない。

おわりに

このように各州で具体的な取組みを始めているアメリカですが、例えばニューヨーク州内のLEP/ELLの高校卒業率は五割以下と、まだまだ課題を抱えています。ある教諭は、「われわれがしてきた失敗から学ぶといいよ」と冗談交じりで語っていました。

一方、日本に視点を移すと、例えば浜松市では、最も外国人児童の割合が高い小学校においてその比率は実に三三・三%となっています。社会のグローバル化というのは、身近なところで確実に進行していると言えるかもしれません。日本で暮らすことになった外国生まれの子どもたちに対して、日本はどのように教育を行っていくのか、そのような視点を持ちながら、引き続き移民受入れの「先輩」であるアメリカの教育制度に注目していきたいと思えます。

海外生活 だより

ニューヨーク事務所

クイーンズへ ようこそ！

旅行者があまり行かない場所を訪ねて見ませんか？

ニューヨーク事務所所長補佐 田中 一光（山形県派遣）

アメリカを訪れる日本人観光客にとつてニューヨークは屈指の人気の都市ですが、おそらく滞在場所は、マンハッタンがほとんどだと思えます。そこで、今回はニューヨーク市民の生活の場、クイーンズ区のお薦め地区を紹介いたします。



クイーンズ区について

クイーンズ区はニューヨーク市の東部にあり、マンハッタン島からは、イーストリバーを渡った所にあります。ニューヨーク市の五つの区の中では区域は最大、人口は第二位の二二〇万人となっています。

二〇〇五年の調査によると、住民の四七・六％は、移民です。日本人にとつて有名な場所というところとニューヨークメッツの本拠地シェイスタージアムとテニスの全米オープンのアサー・アッシュ・スタジアムといったところでしょうか。クイーンズは、衣食住すべてが高いマンハッタンと違い、物価も安く、生活しやすい場所と言えます。

今回は、その中でも特徴的でおいしい食べ物食べられるアストリアとジャクソンハイツの二カ所を紹介します。

1. アストリア

それでは、まずはマンハッタンから一番近いアストリアから紹介しましょう。アストリアは、ギリシヤ系移民が多く住む所として有名



↑ギリシヤ人の台所「タヴァーナ」

ですが、近年はマンハッタンのタイムズスクエアから地下鉄で二〇分という好立地のため、ビジネスマン、学生などが住むようになっていきます。

では、地下鉄NWラインのアストリア・ブルーバード駅を降りてみましょう。駅を降りて南側に下って行くと、右手に「TITAN FOODS」というスーパーマーケットが見えてきます。何を隠そうここが全米で最大のギリシヤ食品を扱うスーパーなのです。ギリシヤ食品というとピンと来ない方も多いと思いますが、有名なものとしては、山羊や羊の乳でできたフェタチーズ、オリブオイル、パイのようなお菓子パクラヴァなどがありません。

さらに南に歩いていくと、ギリシヤ風串焼きスブラキの屋台や、ギリシヤ正教会があります。そしてブロードウェイにぶつかつたら「マラソン銀行」を左に曲がって行きましょう。通り沿いには、ギリシヤレストランが並んでいます。ちなみにギリシヤ語でレストランはタベルナですが、ここはひとつタベルナで食べてみましょう。ギリシヤ料理は、タコ、イカ、ホタテ、エビなどの魚介類の炭火焼きサガナキ、イワシの唐揚げ、魚卵を



↑セント デメトリオス協会



↑ブロードウェイのギリシヤレストラン



↑格安のお昼のインド料理バイキング

看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

使ったタラモサラダなど、ステーキやハンバーガーなどの肉料理で弱った胃にはとても優しい味です。予算は、飲んで食べて大体四人で二六〇ドルが目安です。さて、食事の後は、スタインウェイ通りを歩いてみましょう。スタインウェイの名のとおり北端に行くとピアノの工場があり、見学もできます。大通りを一歩離れると静かな住宅街があり、アパートのベランダにはマリア像が飾ってあります。落ち着いた小洒落たまちアストリアは、散歩をするにも楽しい所だと思えます。

2. ジャクソンハイツ

次は、人種のるつぼというかカオスな場所、ジャクソンハイツです。タイムズスクエアからは、7ラインで三〇分、74 St Broad wayに到着します。まずは、ルーズベルトアベニューに出て北西側に行きましょう。すぐにカレーの匂いがしてきます。ここは、三ブロック界限がインド街です。ヒンズー語の

看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

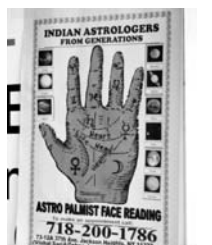


↑おいしいタコのサガナキ

看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

次は、人種のるつぼというかカオスな場所、ジャクソンハイツです。タイムズスクエアからは、7ラインで三〇分、74 St Broad wayに到着します。まずは、ルーズベルトアベニューに出て北西側に行きましょう。すぐにカレーの匂いがしてきます。ここは、三ブロック界限がインド街です。ヒンズー語の看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

次は、人種のるつぼというかカオスな場所、ジャクソンハイツです。タイムズスクエアからは、7ラインで三〇分、74 St Broad wayに到着します。まずは、ルーズベルトアベニューに出て北西側に行きましょう。すぐにカレーの匂いがしてきます。ここは、三ブロック界限がインド街です。ヒンズー語の看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。



↑インド式手相占い

ここは、お昼に訪ねることをお勧めします。なぜかというところ、お昼ならば、チップ込み八

次は、人種のるつぼというかカオスな場所、ジャクソンハイツです。タイムズスクエアからは、7ラインで三〇分、74 St Broad wayに到着します。まずは、ルーズベルトアベニューに出て北西側に行きましょう。すぐにカレーの匂いがしてきます。ここは、三ブロック界限がインド街です。ヒンズー語の看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

次は、人種のるつぼというかカオスな場所、ジャクソンハイツです。タイムズスクエアからは、7ラインで三〇分、74 St Broad wayに到着します。まずは、ルーズベルトアベニューに出て北西側に行きましょう。すぐにカレーの匂いがしてきます。ここは、三ブロック界限がインド街です。ヒンズー語の看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

次は、人種のるつぼというかカオスな場所、ジャクソンハイツです。タイムズスクエアからは、7ラインで三〇分、74 St Broad wayに到着します。まずは、ルーズベルトアベニューに出て北西側に行きましょう。すぐにカレーの匂いがしてきます。ここは、三ブロック界限がインド街です。ヒンズー語の看板が並び、インドの伝統服のサリー、アクセサリー、食料品を扱う店が並び、額に赤い印をつけた人やターバンを巻いた人が歩いていきます。

ここは、お昼に訪ねることをお勧めします。なぜかというところ、お昼ならば、チップ込み八



↑酸っぱさと辛さが絶妙の汁そば



↑筆者一押しペルー料理セヴィーチェ

使った料理も多く特にマグローヤイカやタコなどと紫タマネギなどの野菜をレモン汁できゅつと締めた魚介のマリネ セヴィーチェがおいしいです。一つの地区で両手では足りないくらいいろいろな文化を楽しめるジャクソンハイツにぜひお越しください。



↑ラテン系の店が並び